

の項に就いての豫備知識が記される。次に四十五頁を費して文書に見えた封建制度上の種々の要點―土地の起原と變遷について、主従の領主相互の・領主と將軍との、朝廷との間に生じる種々の關係について、政治的、法制的、經濟的、制度について等、封建制度の中に内在する事象に就いての索引が作られてゐるが、その際西歐封建制度に就いて造詣深き著者はこれらの點に就いて兩者の（特に佛蘭西と）間に存在する差異について有益な指摘を試みられてゐる。これによつて文書はその持つ内容の總ての方面から觀察され、人は之を辿る事に依つてこの文書に示された日本封建制度の特質に就いて善き理解を持ち得るであらう。而かもこの示唆に富んだ記述すらも、著者はたゞ資料そのものゝ提供を目的として學者各自の研究を俟つ上から一の試みにすぎない謙遜されてゐるが、文書を死物としてでなしに實際生活の記録として取扱ひ、それをかゝるつゝしまやかな形式で示さるゝ著者の學者的良心の閃きを見て感謝を捧げぬものはあるまい次に文書研究に使用された書籍目録が七頁あつてから文

書の翻譯と其解説及び脚註に二百五頁を費されてゐる。文書は最も原文に近い形で、正しき意味を傳へんことを試みられ、各文書のはじめ毎にその一般的性質の説明、固有名詞に就いて要領を得た註釋、或は文書の意味する封建的特色に就いての適切な指摘が見得られて、始めて此等の資料に接する歐米の學者にも文書の意味の理解に困難を感じないであらうだけの用意が備へられて、尙入來院家譜の解説三十八頁と索引二十一頁とが附加されてゐる。斯る忠實なる紹介に依つて、入來院文書は始めて單なる日本の西南における一地方の現象としてでなく、人間生活の一記録として世界的に理解されるであらう。卷末に文書が附加されて原文との對照に便を與へられてゐる〔藤〕

### ● 明治維新史

井野邊茂雄著

本書はロゴス叢書の第二編として刊行されたもので、筆を黒船の渡來に起し、安政の開國、公武の衝突、公武の合體、討幕の機運、王政復古、維新の成果、結論の八章に分ちて明治維新史の梗概を平明に叙述してある。全

體の立論は、世に黒船の渡來、公武關係の破綻の如きは幕府崩壞の原因ではなく、僅かに其の一の機會を與へたものであると説くものがあるけれども、維新の政變は黒船の出没に目覺めたる識者が主として政治的に他國の侵害から免れんとする國家擁護の運動であつた。従つて明治維新は經濟狀態の變化に伴ふ社會動因の外に、獨立して行はれた政治運動を基調とせるものと見做さねばならぬ。即ち夫れは黒船の渡來に端を發し、王政復古、廢藩置縣に一段落を告げた政變であつた。然るに王政維新を論ずる者、概ねそれを以て全然經濟上の事由に基づくものとなし、遂に生ける維新の精神を没却せるは不自然にして且つ偏狹なる觀察であるとい説いてある。卷末に維新史研究の参考書と詳細なる索引を附してあるのは讀者にミつて至便である(四六版二六四頁、東京ロゴス書院發行價九五錢)(松野)

## ● 郷歌及び吏讀の研究

(京城帝國大學法文學部紀要第一)

京城帝國大學教授  
文學博士 小倉 進平著

十數年來、朝鮮語の歴史的研究に没頭して來た著者の努力の結晶である。第一編に於ては新羅時代の歌謠である郷歌の研究、第二編に於ては新羅時代に創制されて以後公文書等に使用せられた吏讀の研究を説述し、第三編に於ては以上の研究に直接關係ある「母音調和」「모음조화」の變遷「謙讓の助動詞の變遷」に關する論文を添へてゐる。本書は著書の希求する様に、新羅時代の言語の一斑及び新羅時代の言語と後世のそれとの關係の一般を窺ふべき資料たるに論勿く、歴史家が、殊に朝鮮古代文化の研究者にミつては最も感謝すべき礎石を與へるものであらう。著者の努力に依て解讀を可能にした郷歌二十五首は彼民族の有した素朴な戀愛、敬虔な法悅の心境を和かな姿で示してゐる。これに依て三國史記、三國遺事等の記録によつて示されるもの以上に沈潜して彼の古代精神の本質に觸れる事が出来る。著者の困難とてゐる所ではあるが、佛敎漢學の影響を蒙れるものも然らざるもの、純粹に韓民族固有のものも支那文化の影響を受けたものもが明辯せられ、それらの時代的配列が可能にされるならば